

第15章 フォーカス・グループ, 第17章 観察とエスノグラフィー
『新版 質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』ウヴェ・フリック

担当: I島

第15章 フォーカス・グループ(pp.238-257)

- グループの特性を活かしてデータ収集の状況を拡大し、集められるデータを日常的な文脈により関連の強いものにする試み。

グループ・インタビューとは (pp.239~)

- ある特定のテーマに関して少人数のグループを対象にインタビューを行う。6~8人でグループを構成し、1時間半~2時間のインタビューに参加する (Patton)。
- インタビューをする人は、柔軟、客観的、共感的で、相手を納得させる力があり、かつよい聴き手であることが要請される(Fontana & Frey)。
- “データ収集の中で、ある程度の品質管理が行えるもの” (Patton)。
- 手間を掛けずに豊富なデータを得ることができ、回答者に刺激を与え、出来事を思い出す支えとなる。

グループ・ディスカッションとは (pp.240~)

- 複数の人々に一度にインタビューすることで時間と経費を節約できる。また、参加者間の議論を刺激し、そこで発展するダイナミクスが知見を得る鍵として活用される。
- 近年、マーケティング調査や評価研究のような応用領域で用いられるだけとなっている。
- 調査の目的(pp.241):「もとの文脈から人工的に切り離して、人間の態度、意見、実践などを研究することになるが、それは避けられるべき」(Pollock)--- いかにか“日常的”か。他の目的としては、グループ内で行われる共同の問題解決プロセスの分析が挙げられる。
- グループの形式(pp.242): 自然なグループ(=日常生活に存在しているグループ)や人工的なグループ(特定の基準に従って調査目的のために集められたグループ)で特定のテーマに関して行われる。ディスカッションがデータ源となる。また「同質グループ」と「異質グループ」がある。
- 司会者の役割 (pp.244): 形式的な司会 (formal direction)/ テーマの舵取り (topical steering)/ ダイナミクスの舵取り(steering the dynamics)
※司会者による介入はあくまで、議論のダイナミクスをサポートする範囲に留める必要がある。
- グループ・ディスカッションのプロセスと要素(pp.245):

形式的な手順の説明 → 自己紹介・ウォーミングアップ → 「ディスカッションの呼び水」

呼び水: 挑発的な考え方、短い映画、テキストの朗読、解決が見出されるべき具体的な問題など

- この方法を実施する際の問題は何か? (pp.246): 議論がどのように展開していくか予測できないことや、ディスカッションをどの時点で十分にやり尽くしたかを判断するなど、司会者が臨機応変に対応するしかない。--- 効率的に思えるインタビュー形式だが、実際にはそれほど効率的とはいえない。
- 方法論一般への貢献は何か? (pp.247): より日常的な文脈に近い形で口頭データの収集を行うことができる。
- この方法を研究プロセスにいかにか組み込むか? (pp.248): 循環的な調査の進め方が適している。

研究設問...意見が以下に作られるのか/ グループの中でいかなる社会的な分布が見られるのか
理論的サンプリング...グループの特徴/ メンバー個人の特徴
データ解釈...グループが研究の単位
分析方法...グループとそのディスカッションの経過を出発点とする方法(シーケンス分析)

- この方法の限界は何か? (pp.248): グループが異なればダイナミクスも異なること、グループ間での比較の難しさ、ある意見が誰のものかを特定することの難しさなど
- グループ・ディスカッションは研究設問が特に、グループ内で意見が形成される際の社会的ダイナミクスに関わる場合に有益な方法とされる。また、よく他の方法と組み合わせられて用いられる。

フォーカス・グループとは(pp.249~)

- 特にマーケティングとメディアの調査に用いられる。
- この手法が有益となる目的:

・新たなフィールドでの方向づけを得る。
・インフォーマントの洞察に基づいて仮説を生成する。
・いろいろな調査地や母集団を評価する。
・インタビュー・ガイドや質問表を作成する。
・以前行なわれた研究の結果に関する参加者の解釈を得る。

(Morgan)

- フォーカス・グループの実施 (pp.249): 顔見知りでない人びとのグループの方が適しているといわれている。実行の際は、形式にこだわることと形式張らないことのバランスをとることが重要であり、そのためには一つのグループを単位として捉え、それを他のグループと比較する方法が適している。
- 方法論一般への貢献は何か?(pp.251):

フォーカス・グループの二重の強み

- ①人々がディスカッションの対象に読み込む意味・彼らがいかにその意味を扱うのか
- ②グループの内部・間の多様性と差異を生み出し、日常的意見交換の論証のジレンマ的性質(Billig)を明るみに出す

(Lunt and Livingstone)

- この方法への限界は何か?(pp.251): 参加者それぞれの発言の区別等が可能なデータ記録をいかに行うべきか。
- この方法を研究プロセスにいかに組み込むか?(pp.251): 発言内容を綿密に解釈するよりも、それを要約することの方に重きが置かれる。

共同ナラティブとは(pp.253~)

- 家族研究を出発点の方法である。家族が普段行なっているナラティブの状況になるべく近づけるために、家族全員に出席してもらい、ナラティブの“刺激剤”は用いない、「方法論に基づく、指示的な介入」は控えるなどの注意がなされ、最後にチェックリストを用いてナラティブのなかで触れられなかった社会的データがその家族と一緒に記録されたのち、会話の文脈に関する詳細なプロトコルが付けられる(Hildenbrand and Jahn)。
- 方法論一般への貢献は何か?(pp.254): 家族の持つ自然な構造が、この方法を用いる理由であり、家族以外のコミュニティの形式にどう転用するかは今後検討すべき課題とされる。(例: カウンセリング施設の分析に用いる)
- この方法を研究プロセスにいかに組み込むか?(pp.254): 理論的背景には、現実とは共同で構成されるという考え方があり、そうした構築に根ざした理論を形成することが目的である。
- この方法への限界は何か?(pp.254): 単独の使用はもともと想定されていない方法であるため、今後検証されるべきとされる。一つの事例から出てくるデータが龐大なものとなるため、事例分析の域にとどまるが多く、また特定の研究設問に焦点を絞ったり、データ収集の舵をとることが困難になることが挙げられる。

第17章 観察とエスノグラフィー (pp.269-290)

- 観察者がフィールドの一部とならない研究の仕方や、調査者がフィールドへ参与し同化していくことを通して、フィールドの内部者の知識を獲得することを目指すものがある(Goffman)。
- 実践は観察によってのみアクセス可能であること、インタビューやナラティブによって得られるのは実践それ自体ではなく、実践に関する説明だということが強調される。

非参与観察とは(pp.270~)

- 「観察すること」も日常的スキルの一つであり、質的研究において方法論的に体系化され、応用されている。観察の手續きの分類としては次の五つが挙げられる:隠された観察対公然の観察/ 非参与観察対参与観察/ 系統的観察対非系統的観察/ 自然状況における観察対人工的状況における観察/ 自己の観察対他者の観察 (Freidrichs)。
- 観察者役割:完全な参加者・観察者としての参加者・参加者としての観察者・完全な観察者 (Gold)
- 観察の諸段階 (pp.271):

場の選択 → 観察の記録事項の定義 → 観察の焦点統一のためのトレーニング → 描写的観察
→ 焦点的観察 → 選択的観察 → 理論的飽和

(Glaser and Strauss)

- この方法を実施する際の問題は何か? (pp.272):適切なフィールド環境と、調査のための条件が揃わないという、観察者の役割の定義の問題が挙げられる。
- 方法論一般への貢献は何か? (pp.273):この方法で得られたデータを有効活用するために、観察と他のデータ源とのトライアンギュレーションや、異なった観察者の起用などが提案されている。ここで異なる性別からなるチームで観察研究を行うことが提言されるなど「フィールドワークのジェンダー特殊性」が表れてくる。また、調査者が自己観察を行うことも進められている。
- この方法を研究プロセスにいかに組み込むか? (pp.274):理論的背景には、社会的現実の産出を外部の視点から分析することが挙げられ、ある現象に関する理論的コンセプトを、その現象の頻度や分布との関連で検証することが目的とされる。
- この方法の限界は何か? (pp.274):非参与観察は公共空間を観察するために用いるべきとされるが、観察行為は常に被観察者に影響を与えるため、“出来事をその自然な流れの中で観察する”という目的が実現できるか疑問が残るとされる。
- この戦略はむしろ量的・標準化志向の研究の方法理解にとらわれたものといえる。

参与観察とは (pp.274~)

- ドキュメントの分析、インフォーマントとのインタビュー、直接の参加と観察、内省を同時に組み合わせるフィールド戦略 (Denzin)であり、調査者がフィールドへと入り込み、メンバーの視点から観察するだけでなく、自分の参加によって観察対象にも影響をも与えることが特徴。

参与観察の七つの特徴 (ヨルゲンセン)

- ① 特殊な状況や場の内部者やメンバーの視点に立って、人間的な意味や相互行為に特に関心を向けること。
- ② 日常生活状況や場の「今ここ」に位置を占めることを、調査と方法の基礎とすること。
- ③ 人間存在: human existence の解釈と理解に重きを置いた理論と理論化のあり方。
- ④ 調査のロジックとプロセスは開放的、柔軟かつ便宜主義的であり、具体的な人間生活の場で集められた事実に基づいて問題をたえず定義し直すこと。
- ⑤ 深く、質的な、事例志向のアプローチと、それに見合った研究のデザイン。
- ⑥ フィールドのメンバーとの関係をつくり、維持することを含む、ひとつないし複数の参加者としての役割を演じること。
- ⑦ 他の情報収集の方法と共に、直接の観察を行なうこと。

- 参与観察の段階 (pp.275):調査者はだんだんと参加者となり、フィールドや個人へのアクセスを見つけ、そして観察のプロセスは次第に具体的になり、研究設問の本質的側面に焦点が絞られていく。

描写的観察 → 焦点観察 → 選択的観察

(Spradley)

- 参与観察ではよく、できる限り詳細な観察記録(「厚い記述」)が用いられる。記録用紙の項目が細分化されるほど、項目として挙げられていない事柄が知覚も記録もされなくなる恐れも大きくなるため、描写的観察を行なう際には、観察者は事象や状況の新しい側面にも関心を向けるようにした方がよいとされる。

- この方法を実施する際の問題は何か？(pp.277): 調査対象の現象が、実際に「見える」ようになる観察状況をいかに限定し、選択するか。(社会状況の記述のための九つの側面:①空間②行為者③活動④対象⑤行為⑥出来事⑦時間⑧目標⑨感情 (Spradley))フィールドワークやサブカルチャーにいかにアクセスするか、ということも問題として挙げられる。
- ゴーイング・ネイティブ (pp.278): 外側から批判的に捉える視点を失い、内部での見方を鵜呑みしてしまうことをいう。適切な反省を加え、観察の舵取りと計画を行うなど、「観察者としての参加者」(Gold)の役割が最適であるとされる。
- 方法論一般への貢献は何か？(pp.281): この方法は、フィールドとそこの人々との長期の接触を前提とするため、質的研究をプロセスとして捉えることが可能になる。フィールドや調査対象との相互行為を最も首尾一貫した形で実現でき、また他の方法と統合することで、より調査対象に合ったものができるという柔軟性も有している。
- この方法を研究プロセスにいかに組み込むか？(pp.282): フィールドへのアクセスの問題が方法論上非常に重要とされる。
- この方法の限界は何か？(pp.282): 状況の中ですべての現象を観察するのは無理だということ、パイオグラフィーのプロセスが観察するに難しいこと、包括的な知識体系も接近不可能であることが挙げられる。参与観察を標準化したり、形式化したりすることは困難であるとされ、近年、参与観察をめぐる方法論的議論は停滞気味となっている。

エスノグラフィーとは (pp.283~)

- 観察と参加に他の方法が組み合わせられ、用いられる。
- エスノグラフィー研究の特徴 (pp.284): 調査フィールドへの時間をかけた関与、柔軟な研究戦略、可能な方法をすべて投入すること、フィールド経験を記述することに力点が置かれている。
- この方法を実施する際の問題は何か？(pp.286): この研究ではあらゆる方法とデータを実用主義的に用いることが重要となる一方、こうしたやり方はときおり批判されている。また、適切にエスノグラフィーを実施するうえで研究者が必要とされる、一連の方法に馴染んでいること、それらの方法の専門家であることは、実証研究の初任者にとっては過大な要求となりかねないことが挙げられる。
- 方法論一般への貢献は何か？(pp.287): ポストモダンの調査姿勢へと質的研究が変化していく上で、明確に体系化された特定の方法の適用ということが大きな影響を及ぼしたとされる。
- この方法を研究プロセスにいかに組み込むか？(pp.287): エスノグラフィーは社会的現実とその形成の記述を理論的立場の出発点とし、理論の開発を目的とする。
- この方法の限界は何か？(pp.287): フィールドに参加する戦略、データ解釈、そして特に執筆のスタイルと調査結果提示の権威性と著者性の問題などに関心が向けられている。